

「馴れ顔」考

——薰論ノ一ト——

安藤重和

はじめに

わななくわななく見給へば、火のほかなるに、桂姿にて、いと馴れ顔に、几帳の帷子をひきあげて入りぬるを

(繪角 六^註38)

言うまでもなく、大君中君姉妹の室に薰が忍び込む場面であるが、清水好子氏は「『いとなれ顔に』——いやらしい男として、あてが外れることも知らずに落ちついている所は嗤うべく、薰礼讃の根本方針が忘れられた唯一の瞬間である」と述べておられる。氏は恐らく「(情事に)なれ顔」と解されていると思われるが、「馴れ顔」という語の意味はその意味に決定されているわけではない。一方に「(人に)親近する様」という説が行われており、この語の意味についてはまだ定説を見ていないというのが現状である。薰論の為には重要な箇所であるので以下考察を加えたい。ただし、この語の用例は少く、上代の作品には用例を見出せず、平安時代の作品の中でも管見に入った用例は、『源氏物語』中の五例と『在明の別』中の一例にとどまる。今その一々を吟味して見たい。なお、古注釈書においてこの語に言及されることは殆どない。

—

※「寝なむといふものを」とて強ひて引き入り給ふにつきて、すべり入りて、^源「今は、まるぞ思ふべき人。な疎み給ひそ」と宣ふ。乳母、「いで、あなりたてや。ゆゆしうも侍るかな。聞えさせ知らせ給ふとも、さらに何のしるしも侍らじものを」とて、苦しげに思ひたれば、^源「さりとも、かかる御程をいかかはあらむ。なほ、ただ世に知らぬ志の程を見はて給へ」と宣ふ。霰降り荒れて、すぎき夜のさまなり。^源「いかで、かう人少に、心細うて過し給ふらむ」とうち泣い給ひて、いと見捨て難きほどなれば、^源「御格子まゐりね。もの恐しき夜の様なめるを、宿直人にて侍らむ。人々近う侍はれよかし」とて、いと馴れ顔に御帳のうちに入り給へば、あやしう思ひの外にも、とあきれて、誰も誰も居たり。

(若紫 一321)

尼君と死別し孤児となつた若紫を源氏が北山に訪う場面であるが、この「馴れ顔に」を、「物事に馴れた様子で」と解する説と「(物事ではなく)人に親近する様子で」と解する説とがあり、対立している。私は以下前者を「物馴れ」説とよび後者を「親近(人馴れ)」

説と呼ぶことにしたい。源氏物語の「物馴れ顔」解釈において、殆どの箇所での二説の対立が見られる。^{注3)}しかも、同一の注釈者が或る場面では「物馴れ」説をとり或場面では「親近」説をとるという例が多く、終始一方の説のみ明示し続けている注釈書・現代語訳書は小学館版源氏物語（「物馴れ」説）のみである。

さて、若紫巻においては明らかに「物馴れ」説が優勢である。この動作主体が「好色者」と言われる光源氏であることがそういう結果を招いたのであるうか。（それを裏付ける如く、藤裏葉巻で、動作主体が「まめ人」と言われる夕霧になると、断然「親近」説が有力になる。もちろん後者では別に夕霧が女性の室に忍び入るわけではないから一概にこうは言えないが。）

動作主体を軽視してはならないが、その動作を受ける相手が動作主体にとってどのような意味を有するのかがむしろ重要であるように思う。「通ひ所あまた」の男性はなるほど情事に物馴れてはおろう。だが、自分にとって真に重要な女性を前にして、ぞんざいな「物馴れ顔」を示し得るものであろうか。「物馴れ顔」で相手に接して行くという事は普段の浮気相手の女性なみに相手の女性を扱ってしまふことになるのではなからうか。

「限なう心をつくし聞ゆる人に、いとよう似奉れる」若紫は源氏にとつてまこと重要な人であった。若紫がいる御簾の中へすべり入ろうとした源氏は乳母達の不安を前にして「さりとも、かかる（幼き）御程を、いかかはあらむ（どうもしない）」と言ひ切った。「いとすごげに荒れたる所の、人少なるに、いかに幼き人恐しからむ」と思つて若紫を訪うている源氏は、若紫の「幼き」など百も承知であった。源氏は若紫と男対女の關係を持とうとしているのではな

い。その源氏が何故、「いかにも（情事に）物馴れた様子で」御帳のうちに入ることになるのであろう。理解できない。

源氏は「ただ世に知らぬ志の程を見はて給へ」という。藤壺への容れられぬ思い故に身を焦す源氏のもとへは、一度ならぬ密通の後には、藤壺からの「はかなき一行の御返のたまさかなりしも絶えはて」ている。一層藤壺への思いはつのもり、「秋の夕は、まして、心のいとまなく思し乱る人の御あたりを心にかけて、あながちなるゆかりも尋ねまほしき心もまさり給ふ」激情抑え難き源氏となる。この思いは冬へ持続する。

また、若紫は単に「藤壺のゆかり」であるだけではなかった。

源氏は北山で若紫の素姓を聞いた後、尼君に「あはれに承る御有様を。かの過ぎ給ひにけむ御かはりに思しないでむや。いふかひなき程の齡にて、睦じかるべき人にもたち後れ待りにければ、あやしう浮きたるやうにて、年月をこそ重ね侍れ。同じ様にもし給ふなるを類になさせ給へ」（若紫 一303）と言つていた。若紫を自分と「同じ様」の人ととらえ、母なき悲しき者同志としての連帯意識を抱いていた。それが今回の尼君の死の報を聞くことによつてますます強められ「をさなき程に恋ひやすらむ、故御息所に後れたてまつりしなど、はかばかしからねど思ひ出でて、浅からずとぶらひ給」（若紫 一319）うことになる。源氏にとつて、若紫は、かつて幼き日母に死別した自分の姿そのものであると言える。若紫が幼いからこそ自分が抱きしめてやるのだという面が確實に存する。

若紫が「藤壺のゆかり」であることによつて源氏は限りなく若紫に吸引される。と同時にかつての自分の悲しい姿を若紫に見ることによつて又、強く吸引される。（この二つの源氏の心理が両方共「母

を求める源氏」の姿に収斂されていくことへの詳論は今ほ措く)

これは、共に、好色の男が女に吸引されるというのは、完全に異質であろう。

心理的・精神的に極めて強く吸引され、親近の情強きをいかんともし難く、若紫と自分が別個の存在であることに耐えられないという強い思いが表情にあらわれたものをここで、「馴れ顔」と形容していると思われる。

心理的・精神的には既に若紫と一体化している源氏が、更に進んで物理的にも若紫と合一化しようとしている表情とも言える。「物理的に合一化する」とは決して、性的関係を生ずる事ばかりを意味しない。ここには、「幼き」若紫を我が胸に抱きしめる源氏がいる。それは肉欲から来る行為とは質的に隔絶したものと云える。

二

御文は、なほ忍びたりつるさまの心づかひにてあるを、なか
なか今日は、え聞え給はぬを、ものいひさがなき御達つきじろふ
に、大臣渡りて見給ふぞ、いと理なきや、

つきせざりつる御気色に、いとど思ひ知らるる身の程を、
たへぬ心にまた消えぬべきも

とがむなよ忍にしほる手もたゆみ今日あらはるる袖のし
づくを

などいと馴れ顔なり。うち笑みて、内大臣「手をいみじうも書
きなられにけるかな」など宣ふも、昔の名残なし。

(藤裏葉 三45)

藤裏葉の巻で、夕霧と雲井雁の多年の恋が成就した後、夕霧から「
後朝の文」が届けられた場面である。夕霧が心理的・精神的にだけ

でなく物理的にも正式に雲井雁の父内大臣の許可を得て雲井雁と合一化した後の時点にかかわるものとして、若紫巻の用例とは異なっている。この箇所に関しては殆どの注釈書・現代語訳書が一様に「馴れ顔なり」という形容を手紙の内容にかかわるものと解し、且「親近」説を支持しているのであるが、私の見たところでは、ひとり小学館版源氏物語のみは、この語を(手紙の内容というより)手紙の「口ぶり」にかかわるものにとらえて、「いかにも手馴れた口ぶりである」と訳し「物馴れ」説をとっている。が、「物馴れ」説は少し不安である。娘への後朝の文を不安と期待に満ちて待ちうけていた内大臣にとって、この手紙は常の恋文とは異質の特別な意味を持つてはいるはずであるのに、夕霧の手紙が日常的な「いかにも手馴れた口ぶり」であるのでは、内大臣は「うち笑みて」上機嫌にはなりにくいではなからうか。「物馴れている」という要素は、後朝の如き通常とちがった特別な時間帯においてはマイナスの作用を為しはしまいか。

玉上孫弥氏は、次のように述べておられる。

この歌には、普通の場合の後朝の歌にはない親しい調子、少々あつかましい、得意気な馴れ馴れしさがある。その調子を、「いと馴れ顔なり」という。互いに文で語り合うことに、馴れ親しんで来た二人ゆえ、歌のさまにそれが、にじみ出てしまうのでもある。この「馴れ顔」の「馴れ」は、色好みの男が後朝の文を書き馴れた様子で書いている、という場合の「馴れ」でないことは、もちろんである。

(『源氏物語評釈』 六42)

この御説で大体はよいと思うが、こここの「馴れ顔なり」というのは

もはや「馴れ馴れしき」という語で置き換える事のできない夫婦としての一体的親密さをいう。「とがむなよ」という歌の口調にはそのことが十分感じられよう。(但し、玉上氏が「親近」説をとられるのは、このみである。)

雲井雁との身心共の合一を多年にわたって希求し続けて来た夕霧は今そこに到り得て平穩な境地へ延び出て行く。だから得意そのものである。

三

句「われ人に見すなよ。来たりとて、人おどろかすな」と、いとらうらうじき御心にて、もとよりもほのかに似たる御声を、ただかの御けはひにまねびて入り給ふ。(略)いと細やかになよなよと装束きて、香のかうばしきことも劣らず。近う寄りて御衣ども脱ぎ、馴れ顔にうち臥し給へれば、右「例の御座にこそ」など言へどもものたまはず。御衾まゐりて、寝つる人々起して、すこし退きて皆寝ぬ。

(浮舟 七二)

藤裏葉巻の場合と対照的に、ここでは源氏物語の注釈書・現代語訳書は一致して皆、「物馴れ」説をとっている。私の未見の書に例外があることも予想されるが、傾向として「物馴れ」説圧倒的優勢の相をここに見ることは許されるであろう。だが、実は、結論を先に言えば、この箇所「物馴れ」説が成立することはないと思われる。

さて、この部分は、匂宮が薫を装って浮舟に近づく場面である。この部分における匂宮の行動は全て薫をひたすらに装った演技である点に注意が要る。「馴れ顔にうち臥し給」う場面では右近がまだ

匂宮の傍にいたのであるから、依然として演技中なのである。

匂宮は総角巻で薫になりました事があるから今回の忍び込みについてはその時の経験を生かしたと思われるが、決してそれだけではなく、今回の忍び込みに先立って「かの殿(薫邸)にいとむつまじく仕うまつる家司の婿」で薫の「隠し給ふことまでも」耳にしてはいるはずの「大内記」を呼んで、薫と宇治の女(浮舟)の關係等について詳しい情報を提供させ、慎重且つ念入りに時間をかけて事前の計画を練っている(浮舟 七二、七三)。

匂宮は薫の真似をして宇治の女(浮舟)の横に「うち臥す」のであるから、現実における薫と宇治の女(浮舟)の交渉の程度についても考慮したはずである。同じ夫婦と言っても、新婚時代の夫婦と長い風雪に耐え抜いた夫婦とはおのずから様子が違うはずである。

今、浮舟と薫との現時点までの直接的關係を池田亀鑑氏編『源氏物語事典 下巻』の「年立」から、次に摘記してみる。

○薫二十六才の四月二十余日

薫長谷詣で帰途の浮舟をかいまみる。

○同年九月十二日

薫三条の隠れ家を訪い浮舟にあり。翌暁、薫、浮舟を宇治に伴い、二・三日逗留。

○翌年正月、賭弓、内宴など過ぎた夜陰

匂宮宇治に忍び、薫を装って浮舟にあり。

これが全てである。三カ月以上前に三・四日一緒に過したのみの二人である。そして、薫と宇治の女(浮舟)とのこの間の事情は大内記から匂宮の耳に達していたと思われる。その匂宮が今、薫を装っ

て宇治の女(浮舟)に添い臥す時、何故「馴染を重ねた夫婦らしく見せる」(小学館版源氏物語の頭注)ことになるのであるうか。仮にそんな行動をとっていたとしたら当然右近に不審がられたはずである。「物馴れ」説は妥当しないように思う。

匂宮は薫が宇治に住まわせている女は浮舟のことではないかと感付き「いかにして、この人を見し人(浮舟)かとも見さだめむ」「かの君(薫)の、さばかりにてすゑたるは、なべてのよろしき人には、あらじ」と薫にとって宇治の女が大切な存在であることを推量していた(浮舟 七22)。だから「親近の情頭」に匂宮が演技をした。そして、それは薫が大君の形代たる浮舟に接する態度と同一であったために右近は何の不審も感じず二人の上に「御衾まゐりて」退いて寝てしまったのである。いや、浮舟自身さえ自分に添い臥した人は薫であると初めのうちは信じていたらしい。

小学館版「新選古語辞典」は、源氏物語のこの条を引き、「馴れて親しそうな様子。うちとけがお」の意味を載せて「親近」説をとっている。が、「馴れて」の部分に不安がある。

四

源氏物語の中には以上のほかに、薫を動作主体として使われている「馴れ顔」の用例がまだ二つあるが、その検討に移る前に、「在明の別」の用例を検討しておきたい。

内大臣「よし、ただおはすらん所に専け」と宣へば、(内大臣)いと恐るしうて、ただ「それへそれへ」と聞ゆ。(内大臣)いと馴れ顔にさし歩み入り給ひて、(三条ノ女ト四条ノ上ト)二所おはする前についゑ給へるに姫君(四条ノ上)はあさましう

あきれて、ともかくもいはれ給はず。上(三条ノ女)はいと心つきなく妬きに、几帳ひき寄せて、いと賢うみ隠れ給へり。

(第二章 第十三節)

この「内大臣」は非常な「好き者」であるのだけれど、だからと言って、ここの「馴れ顔」の意が「情事に馴れた様子」ということになるわけではない。何故なら、内大臣が夢のお告げによって、別れになったまま長い間行く不明であった妻(三条の女)と娘(四条の上)に感激の対面をする条であるのだから。長年別れたままになっていた妻子と再会する男が妻子に対して極めたる親近の情を頭にしている。その様を「馴れ顔」と言っているのである。

ついでに、中世の作品になるが、「増鏡」の用例を一つ見ておきたい。

あかつきがたになりぬれば、御木帳ひき寄せて、御殿ごもりぬるかたはらに、いと馴れがほに添ひふす男あり。夢かやとおほして御覧じあげたれば、「年月思ひきこえつるさま、おほけなくあるまじき事と思ひかへさひ、こゝら忍ぶるにあまりぬる程ただ少し、かくて胸をだにやすめ侍らむばかり」など、いみじげに聞こゆるは、はやうありつる中将なりけり。いとうたて、心憂のわざやおほすに、御涙もこぼれぬ。

(さしぐし P171)

「中務の宮の御女」の寝所へ、「源氏の末の君」である「中将なる人」が忍び込んだ場面である。この「馴れ顔」が「情事に物馴れた様子」の意でないことは、「年月思ひきこえつる」以下の中將の言葉が鮮かに証拠だてていであるう。

中將の身分でありながら長年「宮の御女」に思いをかけ心理的・

精神的にあまりにも強烈に魅かれてしまった彼は、そのような自己の情動を「あるまじき事と思ひかへさひ、こころ忍」ぼうとするが忍びきれず、遂に「宮の御女」と物理的に別々の存在であることに耐えられなくなってしまった。身を捨ててまで「宮の御女」との身心共の合一化を願う狂しいまでの男の様を「いと馴れがほに」と形容している。

五

では、源氏物語の中の残された二例の検討に移る。先づ、宿木巻の用例から始める。

(薫) 折々は、過ぎにし方の悔しさを忘るるをりなく、ものもがなや、と、取り返さまほしき、とほのめかしつつ(略)常よりも昔思ひ出でらるるに、えつつみあへで、寄りみ給へる柱のものと、簾の下より、やをらおよびて、御袖をとらへつ。女、さりや、あな心憂、と思ふに、何事かは言はれむ、物も言はで、いとど引き入り給へば、それに付きていと馴れ顔に、半らは内に入りて添ひ臥し給へり。(略)月頃くやしと思ひわたる心のうちの、苦しきまでなり行くさまを、つくづくと言ひつづけ給ひて、ゆるすべきけしきにもあらぬに、(中君は)せむかたなく、いみじとも世の常なり。(略)男君は、いにしへを悔ゆる心のしのび難きなども、いとしづめ難かりぬべかめれど昔だにあり難かりし御心の用意なれば、なほいと思ひのままにももてなしきこえ給はざりけり。

(宿木 六14{17})

薫が大君の形代としての中君に迫る箇所であるが、この「いと馴れ顔に」の解釈に関しては、「親近」説がやや優勢である。「えつ

つみあへで」「苦しきまで」「しのび難き」などの語によって、薫が切実に真に中君を求めている事が語られ、その文脈中に「いと馴れ顔に」という語が存在するのである以上、私も「親近」説をとらざるを得ない。

最後に総角巻の用例を検討する。

(大君は)うちまどろみ給はねば、ふと聞きつけ給ひて、やをら起き出で給ひぬ。いと疾くはひ隠れ給ひぬ。何心もなく寝入り給へるを、いとほしく、いかにするわざぞ、と胸つぶれて、もろとも隠れなばや、と思へど、さもえ立ちかへらで、わななくわななく見給へば火のほのかなるに、桂姿にて、いと馴れ顔に、几帳の帷子をひきあげて入りぬるを、いみじくいとほしく、いかに覚え給はむ、と思ひながら、あやしき壁の面に屏風を立てたる後の、むつかしげなるに居給ひぬ。

(総角 六38)

薫が大君中君の室に忍び入った場面であるが、ここでは「物馴れ」説が圧倒的に多く、「親近」説は谷崎潤一郎氏の訳のみが管見に入ったにすぎない。しかし「親近」説を捨て難く思う。

この部分に関して、「まだ男を知らない大君の目には、薫の行為は、好色的で凶々しく感じられる」(小学館版源氏物語 五242)という「物馴れ」説の立場からの指摘があるが不安が残る。大君が、薫の足音を聞きつけて素早く逃げたまではよかったが、妹を残して来たことに気付き「もろとも隠れなばや」と思った時には恐怖で足がわなないて、「さもえ立ちかへら」ぬ有様であった。そして恐怖にかられながらも彼女の頭は妹の身がどうなるかという心配で一杯であったはず、その彼女が侵入して来た男の素振を手がかりにし

てその男が「情事に素人か玄人か」（「馴れ顔」を「物馴れ」説で解けばこういう意味になり、「好色的で罔々しい」の意にはならぬ）の判断をしている余裕があるのであろうか。処女にとってその判断は極めて困難なはずであるのに緊急の場合に何故するのか？ その男が情事の玄人でも素人でも、妹の身が危いことにかわりはないのに。不審としか言いようがない。

ここはやはり、大君が薫にとつて如何に重要な存在であったかに思いを致すべきではないであらうか。

弁は（大君の）のたまひつる様を客人にきこゆ。いかなれば、いとかくしも世を思ひ離れ給ふらむ、聖だち給へりしあたりにて、常なきものに思ひ知り給へるにや、とおぼすに、いとどわが心通ひて、覚ゆれば、（大君を）さかしだち憎くも覚えず。

（総角 六37）

「おぼつかな誰に間はましいかにしてはじめもはても知らぬわが身ぞ」（匂宮 五139）と孤絶感に苛まれている薫にとつて、「いとどわが心通ひて覚ゆ」る人（大君）はこの上もなく重要な人である。その事に対する認識が忍び込み部分の直前に書かれている事の意味は大きい。心理的には合一している大君が出家してしまつては、物理的にも合一したいという強烈な希望（それは既に何度も直接間接に大君に伝えられていた）が無残に打ち碎かれることになる。「さ

らば、物越しなどにも、今は（対面）あるまじき事におほしなるにこそはあなれ」と弁の話を聞いて危機感をあおりたてられた薫が切羽詰つて行なつたのが今回の忍び込み事件であつて見れば、忍び込んだ時の薫の表情に好色者としてのそれがあつたはずはなく、ただひたすらに身心共の合一への願いが燃えさかっていたはずであると思われる。それを「いと馴れ顔に」と表現していると思われるのである。その意味の「馴れ顔」であるならば、処女の大君もひと目見ただけでも気付き得たと思う。

おわりに

以上述べて来たごとく、少くとも源氏物語の中に使われている「馴れ顔」は全て「親近」説で統一的に把握し得るものと思ふ。^{注⑥}

総角巻の用例についても、清水好子氏の御説の如く「いやらしい男云々」の意味を読みとらなくてもよいように思われる。

注(1) テキストは『日本古典全書源氏物語』（朝日新聞社刊）使用。

注(2) 清水好子氏「薫創造」（『文学』昭32・2）

注(3) ○現代語訳と注釈書（但し、「馴れ顔」の部分の意味が明記してあるもののみ）

本文箇所		書名等	
窪田空穂氏訳	馴れた様子で	若紫巻	藤裏葉巻
	馴れ馴れしげである	総角巻	宿木巻
	物馴れたふうで		浮舟巻
	もの馴れ顔に		
	もの馴れた様子で		

与謝野晶子氏訳	馴れたことのように	馴れ馴れしく書いて あった	来馴れた所だという ようにして	親しい男女の仲のよ うに	良人らしく
谷崎潤一郎氏訳 (第三回目訳)	馴れ馴れしく	馴れ馴れしく書いて あります	馴れ馴れしそうに	馴れ馴れしく	もの馴れ顔に
円地文子氏訳	物馴れた様子で	ある 馴れ馴れしく書いて	もの馴れた様子で	馴れ馴れしげに	もの馴れたふうに
筑摩書房古典日本文 学全集本 (吉沢義則他)	馴れ馴れしく	ある 馴れ馴れしく書いて	馴れた様子で	馴れ馴れしく	もの馴れた様子で
源氏物語総釈 (沼沢龍雄)	物馴れた様子で	ある 馴れ馴れしく書いて	馴れた様子に	馴れ馴れしげに	もの馴れ顔に
源氏物語講話 (島津久基)	馴れて心得顔に				
日本古典文学大系本 (山岸徳平)	物馴れた様子で	ある 馴れ馴れしい様子で	物馴れている様子で	馴れ馴れしい風に	馴れているような顔 をして
全釈源氏物語 (松尾 聡)	もの馴れ顔に				
源氏物語評釈 (玉上琢弥)	いつもしなれている 風に	わがもの扱いである	しなれているふうに	今が初めてでないみ たいに	いつもしつけている ふうに
小学館版源氏物語 (阿部・秋山・今井)	もの馴れたふうで	手馴れた口ぶりであ る	場慣れた様子で	もの馴れた体で	もの馴れた様子で
新潮日本古典集成本 (石田・清水)	馴れ馴れしく				

○辞書（「馴れ顔」の項を欠くものを除く）

講談社・日本類語大辞典	なれたる様に
大倉書院・改修言泉	馴れたるらしきやうす
富山房・修訂大日本国語辞典	馴れたる如き顔つき 馴るるやうなる様子
全国書房・言林	なれたような顔つき
三省堂・辞海	なれた顔つき。物馴れた 平然とした顔・態度
源氏物語辞典（北山谿太）	馴れ親しめるさま。親し みむつべるさま。うちと けたるさま
旺文社・古語辞典（増補版）	もの馴れた顔つき・態度 なれてゐるさま
改訂版角川古語辞典	なれて打ち解けた顔つき またその態度
講談社・国語辞典 （改訂増補版）	なれ親しんでいる様 なれたような顔つき
小学館・新選古語辞典 （改訂新版）	馴れて親しそうな様子 うちとけ顔
三省堂・新明解古語辞典	なれたような顔つき
角川新版古語辞典	なれて打ち解けた顔つき また、その態度
金園社・精解六万語古語辞典	なれ親しんでいるさま
角川国語中辞典	もの馴れた顔つき、態度 なれて打ち解けた顔つき。
三省堂・広辞林（第五版）	なれたような顔つき・態 度
岩波古語辞典	馴れた様子
小学館・日本国語大辞典	馴れて親しそうな顔つき 様子うちとけた様子

改訂新潮国語辞典	現代語
岩波書	店・広辞苑 （第二版補訂版）
慣れた顔つき 慣れた様子 なれたような顔つき 物なれた様子	

勿論漏れもあろうが、一応の傾向は知られよう。

注(4) 『在明の別』大槻脩著 桜楓社 昭45・6

注(5) 校注古典叢書『増鏡』木藤才蔵校 明治書院 昭44・4

注(6) この点に関しては『源氏物語辞典』（北山谿太）の説も同

じ。但し、語義内容に関して相違点あり。（注(3)辞書の項参照）源氏物語では、単なる好色の相手程度の女性との間の描写にはこの語は使われていない点にも注意したい。